横浜訓盲学院

研究協力校（課程又は障害種）

・横浜訓盲学院（視覚）

研究の成果

観点１：
各モデル事業内、及び近隣自治体間における概念（用語）の共通理解・合意形成

1-1.　パーキンス盲学校との連携

平成 29 年度に引き続き、研究協力校は米国のパーキンス盲学校と連携協定を結び、研究を行っている。パーキンス盲学校は米国で最も古い盲学校であり、米国で最初に盲ろう教育を行った学校である。ヘレン・ケラーの家庭教師であったアン・サリバンも同校で学んだという歴史ある学校である。現在も約 50 名の盲ろう幼児・児童・生徒が学んでおり、世界で最も多くの盲ろう児を最も長く教育し続けている。研究協力校との関係は 90 年前から続いており、パーキンス盲学校からの実践知の共有は従来よりなされていた。本事業においては、平成 30 年度も 29 年度と同様に、盲ろう幼児児童生徒が多く在籍する横浜訓盲学院をフィールドとし、パーキンス盲学校国際支援部門パーキンス・インターナショナル（以下、PI）の協力を得ている。

1-2.　教員間での共通理解・合意形成の方法

研究協力校の教員は４つのグループにわかれており（幼稚部から小学部３年生までの「幼小グループ」、小学４～６年生の「小学部」、「中学・高等部」、「高等部専攻科生活科」）、各グループで週に１～２回、ミーティングを平成 30 年度も行った。また、毎週水曜日に、管理職と各グループ主任で、主任会議を開き、生徒状況などの情報を共有し、それぞれのグループでも情報を共有している。

観点２：
教育課程・個別の指導計画の実施状況とその評価

2-1.　盲ろう児のアセスメント

盲ろうの幼児児童生徒の自立活動を進める際、盲ろうという障害に配慮したアセスメントが必要である。なぜなら、盲ろうの子どもたちは視覚と聴覚の両方に障害を有し、基本的な人間関係の形成、感情の交流、コミュニケーション方法の獲得、概念の形成、出来事の全体像や因果関係の理解などが非常に困難になるためである。

研究協力校が平成 29 年度に米国及び欧州の文献等を調査した結果、盲ろう児のアセスメントには標準化されたものがないことを明らかにしていたが、平成 30 年度にもさらに欧州の文献等を精査し、海外でも盲ろう児標準化されたアセスメントがないことを確認した。パーキンス盲学校においても標準化されたものはなく、いくつかの環境条件下で盲ろう児の行動を観察し、コミュニケーションのパートナーとして評価者が関与する方法が取られている。その理由としては、盲ろう児は視覚と聴覚の情報が限られており、評価者が意図して提示する物や人に注意を向けること自体が困難であることが挙げられる。かわりに、子どもが安心している状態で、今、関心を示していること、現に行っていることに評価者が導かれ、かかわりを展開することが盲ろう児の実態把握への効果的な取組とされている。これは「子どもに先導されるアセスメント（Child-Directed Assessment）」と称される。

2-2.　個別の指導計画の作成と評価

個別支援計画及び、個別指導計画を年度始めに作成し、個別指導計画においては、半期ごとに見直しを実施し、課題の達成状況について評価を含めて確認をしている。

年度末には、総合評価を行い、次年度の個別支援計画と取り組む課題を明確化し、支援の在り方を検討し引継いでいる。また、個別支援計画は年３回、保護者との面談、課題の達成状況の確認・見直しを行い、総合評価を行っている。

観点３：
個のニーズにあわせた指導法、学習環境・支援の工夫

3-1.　盲ろう児にとっての触覚の重要性

全ての活動において、教員が盲ろう児に触れる・触れられることが不可欠であり、盲ろう児にどう触れるかについて学ぶことが教員には必要となる。研究協力校では、盲ろう児と触覚について、ＰＩ専門家の講義と演習を行った。その教材の一つである論文「盲ろう者にとっての手の重要性」を翻訳し、横浜訓盲学院のホームページに掲載した（http://kunmou.jp/pdf/20191105itaku.pdf）。

3-2.　調理の活動

調理の活動は、本物を使った盲ろう児にとって意味のある活動の１つである。授業で本物を使い、子どもにとって意味のある活動を行うことは、盲ろう児の教育活動の組み立ての方針（１．盲ろう児にかかわる人及び出来事の一貫性、２．ルーチンの有効性、３．子どもの興味関心に従い授業を組み立てる、４．選択できる機会を用意する、５．授業では本物を使って、子どもにとって意味のある活動を行う、６．自立を奨励する、７．家族とパートナーになる）の１つでもある。研究協力校では、毎週一回一時間、調理に取り組んでいる。盲ろう児にとって、調理はその過程の意味がわかりやすく、結果に対する高い動機づけもあり、多面的で意欲的な学びをもたらす授業となっている。

調理の活動に使われる部屋の入口には、部屋の名前が黒地に白文字で、漢字と平仮名を使って書かれている。その傍には部屋を象徴する物としてスポンジが付けられている。スポンジは触って何の部屋なのか理解することもできる。このように、文字や実物を使って、児童生徒がわかりやすい表示がされている（資料１）。

資料１　調理実習室の入り口の表示

3-3. 盲ろう児のコミュニケーション

コミュニケーションに関しては盲ろう教育における中核課題の一つである。研究協力校はPI専門家や国内専門家との協議等を通して、教員が盲ろう児とコミュニケーションを行う上で重要な点を整理し、表１のように５点にまとめた（表１）。

表１　盲ろう児とのコミュニケーションにおいて重要な点

１、観察に必要とされる視点と配慮
２、盲ろうという障害がコミュニケーションにもたらす困難の理解
３、「コミュニケーション」は何から成り立っているか
４、盲ろう児にとって豊かな人間関係や生活につながるコミュニケーションはどのような特質をもつか
５、当該児童に適したコミュニケーション方法は何か

研究協力校では、コミュニケーションの多様性を重視している（資料２）。資料２のように、タブレットを用いた写真コミュニケーションや、点字タイプライター「パーキンスプレーラー」を用いた作文などを行っている。

資料２　多様なコミュニケーションの例

観点４：
障害のない幼児児童生徒・地域社会との交流及び共同学習の設定

4.　学院内及び学区域の小学校等との交流教育

平成 30 年度も引き続き、幼稚部、小学部の幼児児童の中で、交流教育という形で、週に１回、あるいは年に数回の交流教育として、自宅の学区域にある保育園、幼稚園、小学校の活動に参加している。

観点５：
多面的な視点からの学習評価・授業評価・学校評価の実施

5.　パーキンス盲学校国際部門専門家及び国内専門家との協議

平成30年度はPI専門家2名を招聘し、盲ろう教育における「触る・触られる」ことの意味について講義と演習を行った。4名の盲ろう幼児児童の実践に参加し協議を行った。また、研究協力校の学院長がパーキンス盲学校を訪問し、乳幼児から22歳までの盲ろうの幼児児童生徒の授業を見学し、アセスメントと教育実践について情報収集と研究協議、及び次年度のPI専門家による研修内容に関する協議を行った。国内専門家との協議に関しては、全国盲ろう者協会亀井笑氏を招き、研究協議会「パーキンス盲学校における盲ろう教育とアセスメント−盲ろう児の興味関心を土台にして築き上げること−」を開催した。

観点６：
新学習指導要領に対応した特色ある取組

6.　盲ろう児のアセスメント及び指導における重要な点の整理

視覚と聴覚の重複障害がある盲ろう児の自立活動を進めるにあたり、盲ろうという障害に配慮したアセスメントを通して、適切な実態把握を行い、授業を実践し、評価を行う必要がある。研究協力校は、海外や国内の専門家との協議や日々の実践を通して、盲ろう児のアセスメントや指導における重要な点を整理し、再び日々の実践に生かしている。